

TOPICS



〈フォトシティさがみはら2025 受賞作写真展〉が10月10日から相模原市民ギャラリーで始まりました。10月11日には〈ほねごり杜のホールはしもと〉で表彰式が行われ、つづいてプロの部受賞者を迎え、伊藤俊治審査員の進行でオープニングシンポジウムを開催。テーマは「戦争と平和を見つめ直す」。ご自身による作品解説はそのまま見どころを教えてください。そこで、抜粋してその一部をご紹介します。



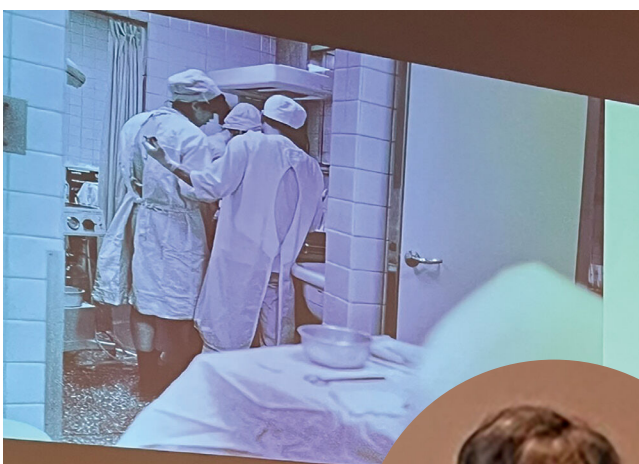
表彰式にてプロの部の
講評をされる
伊藤俊治さん

さがみはら江成常夫賞 亀山 仁さん

『Burma/Myanmar 戦禍の記憶 2019-2024』

いま、ここにある戦争の記憶

永年にわたりミャンマー（旧ビルマ）を撮影し続けてきた相模原市在住の写真家・亀山さんが記念すべき改称後初のさがみはら江成常夫賞受賞者です。ミャンマーは中国、ラオス、タイ、バングラデシュに囲まれた国。かつての日本軍が「史上最悪の作戦」と呼ばれるインパール作戦を繰り広げた地です。その戦禍の記憶は人びとに、土地に残っています。その後のクーデターに撮影もままならないなか、亀山さんは撮影を越えてミャンマーの人びとへの支援活動を日本で取り組んでいます。戦禍が過去の記憶となってしまうと、さらに形を変えて今なお続く戦争のなかに人びとがいるからです。戦争とは何か、平和が何であるか。私たちは考え続けなければなりません。伊藤俊治さんは、シンポジウムの締めくくりにカントの『永遠平和のために』から引用され「平和は常に創造されねばならない」と語りかけられたのでした。



新人奨励賞 河田真智子さん

『医療への信頼』

医療のために平和は必須

左の写真は、出産後5分間産声をあげなかったわが子を分娩台から撮影したものです。以来、もともと島を撮る写真家だった河田さんは重度の障がいを持つ娘の夏帆さんと医療との関わりを36年間撮影し続けることになりました。杜のホールには車イスの夏帆さんも駆けつけて、お母さんの晴れ姿に立ち会われていらっやいました。今、病院内で写真を撮ることはほとんどできなくなりましたが、「なっちゃん」の生きる姿と同時に医師や看護師さんの現場で働く姿を記録した写真は医療従事者への信頼に満ちています。



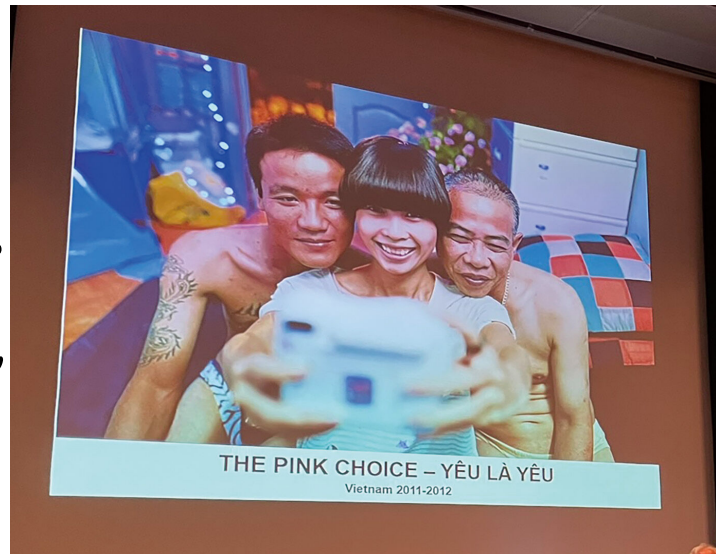
彼らが自身をどのように見ているかではなく、私が彼らをどのように見ているかを示したい

さがみはら写真アジア賞

『The Pink Choice』

マイカ・エランさん (ベトナム)

敗戦80年の今年は、ベトナム戦争終結から50年。その節目に受賞対象地域がベトナムで、それが「ピンクの選択」という同性カップルの愛をテーマにした写真シリーズで世界報道写真展の「現代社会の問題」部門で最優秀賞を受賞するなど、世界的に注目されている彼女を相模原にお招きできたことはとても意義深いと言えるでしょう。カンボジアにきっかけをもらってベトナムで、どちらでも必ずしも世間の眼差しは優しくはないはずの彼らの生活空間や日常を、被写体への共感をもって撮影していくマイカさんの写真は、確かに、それを見る私たちの側の不寛容を炙り出します。もっと人生を肯定し、共感していいと気づかされるのは心地良いショックでもありました。



新人奨励賞 『Land of Fusion』

中西 敏貴さん (地と記憶)

おおわれて見えないものを撮る

和人の文化からではなく、サハリンやアムール川流域から続くオホーツク人の海洋文化として考えることができたのは、ご自身が大阪から北海道に移住したからかもしれないと中西さんは語ります。ひとつの文化がおおわれて見えなくなったものを丁寧に掘り起こし追体験し想像する。オホーツク沿岸は10cm掘れば遺跡に出会えるそうです。分断の進む今こそ必要な眼差しかも知れません。



見逃した市へ
ごちそうどうぞ！
フォトシティさがみはらプロの部受賞作品展
120(火)〜22(月) 日曜休館 会場・ミニシアター